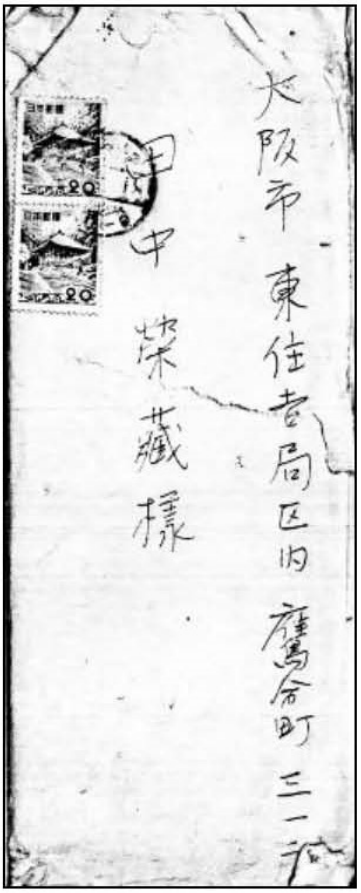
資料 9.1955 年 1 月 18 日付諏訪多栄蔵氏宛石岡からの手紙〔文献 74)〕

1 月 18 日付　田中栄蔵氏宛石岡からの手紙

〔五朗が墜落死して新聞に掲載されてから、山岳関係者や知人などからお悔やみの手紙が何通も届いた。その中に田中栄蔵氏（ペンネーム諏訪多栄蔵氏）からの物もあり、石岡は返信を 1 月 18 日付で田中氏に出した。その手紙のコピーが、昭和 50 年代から交流のあった日本勤労者山岳連盟の伊藤正俊氏から昭和 60 年 6 月 15 日に送られてきた。田中氏と伊藤氏がどういうご関係だったのか、定かではない〕



久しく御無沙汰致しておりまして申し訳ございません。

考えてみますれば、ヒマラヤのことで貴兄宅をお伺いして以来のことです。早くお手紙をしなければと思いつつも、言い訳があまりに多くて、どのようにお詫び申し上げてよいやらと思い悩んでおるうちに、遂に今日になってしまいました。喪心お詫び致します。

先日、お見舞いのお手紙いただきましたように、20 年間の私の山歴に遂に遭難を記録してしまいました。それが、私の弟という、誠に思いがけない形で発生してしまいました。(弟であったことはせめてもの罪滅ぼしと考えています)

かねて覚悟していたこととは言え、人間にとっての最大の悲しみは、ひしひしと私をさいなみます。

今度のリーダー石原にも、また私自身にも、また隊員にも反省すべき点はあまりに多く、一つ一つが涙の種となります。東壁の第二テラスか、Ｃフェース直下か、あるいはＢ沢に、今弟が冷たく横たわっていようとは考えられません。元気で出て行ったそのままの姿で、帰って来るように思われてなりません。2 日夜の恐ろしい電話。3 日朝慌ただしい出発。岩壁に残った二人の救出。弟の遺体の必死の捜査。何ものも得ずして両親に会うつらさ。すべては夢のようです。

しかし、結局ザイルの切断に思いは集中してゆきます。ザイルさえ切れなかったら、否、

いったい何故切れたのだ。そんな馬鹿な筈がない…全くどうしてよいか分からない感情にかられます。結局、私としてやるべきことは、この理由を究明することによって、このような悲しみが二度と起きないようにするということだと考えます。（大それた試みで到底出来る筈はありませんが、少しでもそう努力したいと思っています）貴兄にも、無私の御協力がお願い出来ると確信致します。或は主客転倒する可能性が大ですが、どうかお願い申し上げます。

実はザイルの切断について、同封ガリ版刷りの物を作ってしまいました（原稿は１月７日上高地で）が、出来得れば、このような推測によるものを、印刷発表する前に、よく実験し、或は夏まで待って現場調査してからにするのが、本当だと思ったのですが、１月６日の朝刊（毎日）で、竹節さん(毎日新聞運動部長)の記事で、東壁のザイル切断はザイルの欠陥でなくて①ザイルの扱い方悪し。②古ザイル使用。③ザイルテスト不備。④ザイル細すぎ。その他であろう。と書かれてありましたのと、実験するにしても費用その他で簡単にはゆかないかも知れないと考え、ともかくさしあたって、当事者である私達の見解及び事実について発表すべきで、もしも竹節さんの言が正しくなくて、ザイルそのものに欠陥があったとすれば、また次の遭難を起こす可能性があると怖れたからです。それで１月７日、上高地ホテルで大急ぎで作って、同じ物を５部写し、１月８日下山の時松本で、朝日・信毎・中日に渡しました。（ザイルの切れ口などの写真を撮られました）そのうち中日では大部分記事となりましたが（記事とする前に、ザイルを売ってくれた熊澤氏に私の記事を見せ、記事の内容、特に販売状況が間違っていないか、確かめられました）朝日では全然出ません。私はこの理由が分かりませんが、①私の記事の誤り、または穏当でない。②メーカーの圧力。③その他と思っています。（欄外に→を使用して朝日新聞に出なかったことについての書き込み有）←実は小生、14,15,16,17 と発病、病床にいましたので知りませんでしたが、15 日夕刊に出たことを今知りました。藤木九三先生(登山家。ロッククライミングクラブ RCC を設立。著『屋上登攀考』『雪・岩・アルプス』等) はご存じでしょうか。ザイルの切れ口については、梶本さん(関西登高会、梶本徳次郎氏。東壁での遭難時に救援)もよく御存じです。尚、梶本さん方には格別御世話様になりました。貴兄からも誠に感謝していたとお伝えくだされば幸いです。誠に話がちぐはぐですいません。

救出された二名については梶本さんよくご存じですが、ともかくも助かったことは、不幸中の幸いと存じます。凍傷の模様は、医者自らもよく分からないらしくて、今尚はっきりしたことは言ってくれませんが最悪の場合、澤田の右足親指切断だそうです。とにかく凍傷には経験のない医者ばかりです。何か良い御教示はありませんでしょうか。

私たちの将来に関する問題が、次に浮かびあがります。神戸の町、三重県の反響は、むしろ岩稜会の結束、向上を、求める声が現在強いとのことで、私にとっては、非常に意外な現象です。しかし、私自身は、今回だけでなく、会そのものに多くの反省すべき点があり、そういうものが、各自反省され、完全に修正されるのでなければ、次の遭難はまた可能性があることになって、それならばむしろ解散すべきだと考えるのですが、しかし、解散すれば各自でたらめに山に入って、むしろ遭難の危険を増すという市民の声に、一体どうしたらいいかと思い悩みます。名案はありませんでしょうか。しかし、反省すべき内容を申し上げていないので、難しいのですが、個性、従来の技術そのものに対する欠陥等微妙で、一度お目にかかりたいと思います。

次に、これからの会の目的とも関連しますが、実はこのことは、既に申し上げていなければならないことなのですが、言いそびれ、申訳もありません。あるいはご存じかも知れませんが、昨年 7 月長越さん(登山家で山岳小説家ペンネ－ム安川茂雄氏)から新島さん(出版社朋文堂社長)の依頼とのことで、穂高の岩場ガイドブックを書いてくれと頼まれました。これは既に貴兄の『穂高岳』で尽くされている訳であって、何も私のやるところはないと思ったのですが、当時、本職のことで忙しかったので心ならずも返事を書かずにどうしたものかと思い迷っていました。しかし、ガイドブックとはどういうことかともう一度考えてみますと、例えば穂高のどこどこの岩場のル－トへ行ってみたいという希望のある者に、①まずその人がその場を登る資質があるかどうか、即ち安全に登るだけの実力を持つかどうかの査定をすることが大切で、次に②ガイドブックさえあれば、間違いなくそのル－トに取付くことが出来、また登攀中といえども、自らがどのような位置に居て、これからどれくらいの時間がかかるのか、ということを知らせる必要があると思います。丁度、スイスのガイドは、例えば客がマッタ－ホルン ツムツトグラ－ドへ行きたいと言うと、まず手ごろなゲレンデで客のテストをする。次に連れて行って間違いなく安全に戻って来る、訳ですが、ガイドブッ

クがそれの代わりをすれば良い訳だと考えました。また最近は写真を入れることが多くなっているので、写真とスケッチと平面図をいつも同一スケールで並べていれば、ルートを見る目がはっきりすると考えました。①については貴兄がかつて言ってみえたウエルゼンバッハ（1925 年、ドイツ・ミュンヘンのアルピニスト、Willo Welzenbach 氏が難易度等級表を提案した。現在ヨーロッパで使われている難易度はこの Welzenbach 表をもとにしている）の岩場等級表みたいなものを作って、例えば中又白の上部のザラザラの部分は、どのくらい難しいから、ここを登るには、少なくともどこでテストをしておかねばならぬといったことが、自然に分かるようにしなければならぬと思います。しかし、これはまた大変なので、またもし新島氏が本年夏に間に合わせたいと考えておられれば、とうてい私達だけでは出来ないので、8 月に北穂へ行ったとき、小山さん(小山義春氏、北穂小屋初代主)に話をして、滝谷・本谷・白出・ジャン（ジャンダルム）を含めて涸沢を頼んで、私達は、屏風・又白・明神・岳川をやると一応話したのですが、事実は小山さんの小屋経営で不可能ではないかと言うことが後で分かったのですが。それで 12 月に東京に行ったとき、新島氏、長越氏（共に初対面で非常に嬉しかったでした）にお会いして、このことについてよく話し合って、明年の夏に間に合えばよかろうと決めました。（私達としては、昨夏と昨秋とで、屏風・又白・明神を殆ど登り直し、写真はかなりそのつもりで集めていましたので、見ていただいて一応意志のあるところを了解してもらった訳です）実は長越さんの発言で、主な初登攀記録を入れたらどうかと言うことで、私も賛成しましたが、しかし、そうなると、私達だけの努力ではどうにもなりません。全てのルートを登り直して、比較したり、ルートをうつしたりすることは出来ても、初登攀記録となると、その記録をかいた人が誰であって、どうしてお借りするように頼むかということが分かりませんので、これは貴兄にお願いしなければならない（もとよりそうでなくても、登るべきルートの全ては、貴兄の『穂高岳』による以外になく、貴兄のお許しと御力添えがなくては何も出来ませんが）と考え、冬山が終わり次第、全力をそちらに向けようと考えていたのです。

しかし、今や意外の事件で「すべてのルートを登る」ということだけでも、それどころか、このガイドブックを作るということ自体に、否、岩稜会そのものにも検討さるべき事態となって、一切は白紙となったともみてよいのですが、もう一度総会ではかり直すことになる訳

ですが、小生としては、私の弟もこのことには努力していましたので、その記念の意味も兼ね、ここで、目標をガイドブックにおきたいと願っている次第です。

本当に勝手な事ばかり申し上げてすいませんが、そうなったときにはどうかよろしく、文字通り御指導、御鞭撻いただきますよう伏してお願い申し上げます。

別紙ガリ版刷りについて、私自身の根本的な誤り、資料のミス等考えていただき、また実験についての方法等、御教示いただければ幸いと存じます。

誠に乱筆失礼しました。

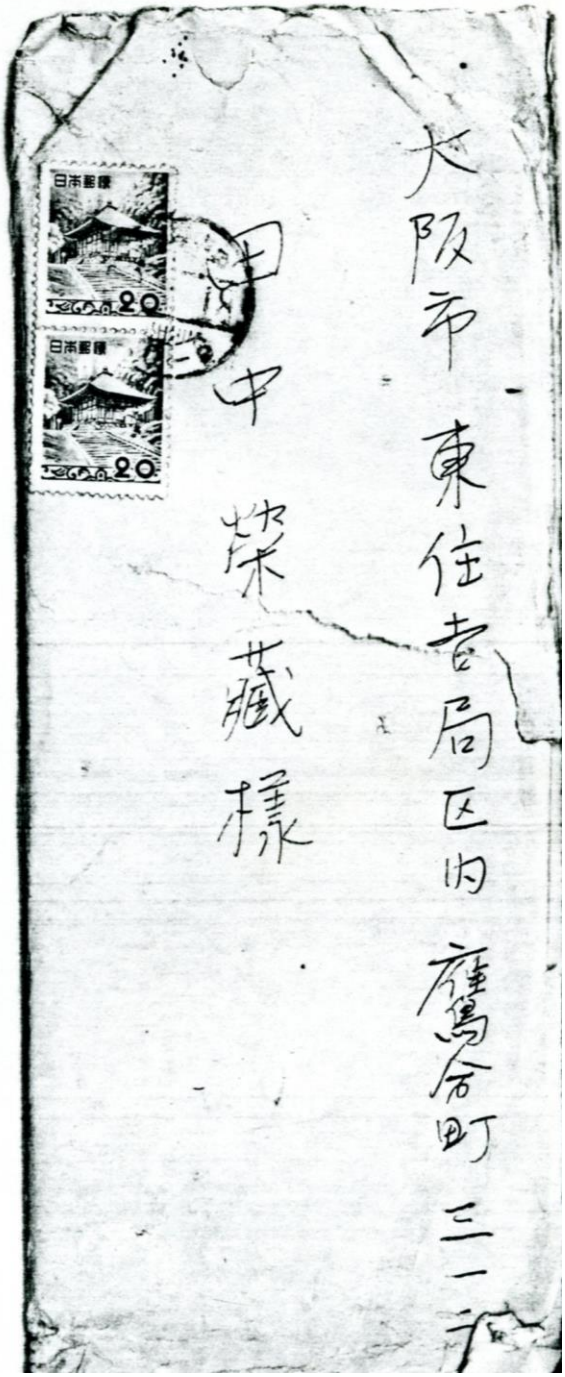
尚、末筆ながら奥様に宜しくお伝えくださいますよう。

1 月 18 日　　石岡繁雄

スワタ栄蔵様

資料 9.1955 年 1 月 18 日付諏訪多栄蔵氏宛石岡からの手紙

60年
6月15日
伊藤正俊氏から
送付



1.

No.

久々御無沙汰致しておりまして申訳ありません。

考えてみますれば、ヒマラヤのことで貴兄宛をお伺いして以来のことです。

早くお手紙をしなければと思いつつも言訳があまりに多くてどのように

おわび申上げてよいやら（と思いなやでおるうち）遂に今日となってしまいました。東京お詫び

致します。

先日、お見舞の御手紙いただきましたように、二十年間の私の山

厂に遂に遭難を記録してしまいました。それが、私の弟という、誠に

思いがけない形で発生してしまいました。（弟であることはせめてもの

罪ほろぼしと考えてはいます）

かねて覚悟していたこととはいえ、人間にとっての最大の悲しみは、ひしひし

と私達をさいなみます。

今度のリノ、ロ原にも又私自身にも又隊員にも反省すべき点は

あまりに多く、一つ一つが疎の種となります。東壁のオニテラスが

Cフェース直下か或は13次に、今弟が全く横たわっているのを

考えられません。元気で出ていた、そのままの姿で帰ってくるように

思われてなりません。二日夜のおそろしい電話、三日朝あわた

No.

助しい出発、岩壁に残された二人の検出、第の遺体の死の捜査
何ものも残ずして、両親に会うつらさ、すべては夢のようです。
備し、結局、ザイルの切断に思いは集中してゆきます。ザイルさえ切れ
なかったら、否、一体何故切れたのだ。そんな馬鹿な話がない……
全くどうしておいか分らない感情にかられます。結局私としてやるべ
きことは、この理由を究明することによって、このような悲しみが二度と
おきないように、すると云うことだと考えます。（大それた試みでは
[illegible]で到底出来る筈はありませんが少しでもそう努力したい
と思います）。貴兄にも無理の御協力がお願い出来ると確信致し
ます。或は主客テントウする可能性が大ですがどうかお願い申上
げます。

（原稿は一月七日上海出で）

実はザイルの切断について同封がリバン刷りのものをつくってしまいました
が、出来ればこのような推測によるものを印刷発表する前に、よく
実験し、或は夏までまって現場の調査してからにするのが本当だと
思ったのですが、一月六日の朝刊（毎日）で竹節先の記事で東壁
のザイル切断はザイルの跡かんでなくて①ザイルのあつかい方、その他であろう

②古ザイル使用 ③ザイルテスト不備 ④ザイル細すぎ

実は4生、14、15、16、17、と 胃病、病床にいましたので 知りませんでしたが 15日夕刊に 出たことを 今知りました

と 書かれてあるましたのと、実験するにしても 費用その他で 簡単には
いかないかも 知れないと 考え、ともかく さしあたって 当事者である 私達の 見解及
び 事実について 発表すべきで、もしも 竹節さんの 言が でたらなくて、
ガンそのものに 欠かんがあったとすれば、取次の 遅延をおこす 可能性
があるとおそれたからです。それで、一月七日、上高地ホテルで 大いそぎで
つくって、同じものを 三部 ラフし、一月八日 下山の時 松本で 朝日、信毎、
中日に 渡しました。（ガンの切口の 写真 等をとられました）、そのうち
中日では 大畧、記事となりましたが（記事とする前に、ガンをうつて
くれた 熊沢氏に 私の記事をみせ、記事の内容、特に 賠償、状況
がまちがっていないか、たしかめられました）朝日では 全然ありません。私は
この理由がわかりませんが、①私の記事の誤り、又は あんとうでない。②メーカー
の圧力 ③その他 と思っています。藤木九三 先生は 御なくなりませんが、
要するに すべては ガンに関する実験にあると 考えています。
ガンの切口については 根本さえも よく御なくなります。尚、根本さえ 元
には 格別御世話様になりました。責任からも 感謝していたとおもう。
へ下れば 幸です。 敬に 話が ちぐはぐで すみません。

救われた二名については、橋本さん よく御存じですが、ともかくも助かったことは、不幸中の幸と存じます。[redacted] 凍傷の模様は、医者自ら よく分からないらしくて、今商はっきりしたことは いってくれませんが、最悪の場合、両足の右足オヤ指切断だそうです。とにかく凍傷には経験のない医者ばかりです。何かよい御教示はありませんでしょうか。

私達の将来に関する問題が次に移びあります、かんべの町、三重県の反響は むしろ若干会の結束、向上を、求める声が現在強いとのことで、私にとっては 非常に意外な現象です。併し、私自身は、今回だけでなく、会そのものに多くの反省すべき点があり、そういうものが、各自反省され、完全に修正されるのでなければ 次の遭難は又可能性があることになって、それならば むしろ[redacted]かいさん すべきだと考えるのですが、併し、かいさんすれば 各自でたらめに山に入って、むしろ遭難の危険を増すという市民の声に、一体どうしたらいいかと思い悩みます。名案はありませんでしょうか。しかし、反省すべき内容を申上げていないので、むつかしいのですが、個性、従来の技術そのものに対する、けつかん、等、激烈で、一度お目にかかりたいと思います。

No.

これからの会の目的も間違じますが、実は
次に、この二点は既に申しあげてなければならないことなのですが、言い
そびれ、申訳もありません。あるいは御存知かもしれませんが、昨年七月
田長越さんから新島さんの依頼との事で、ホタカのガイドブックをかいて
くれとたのまれました。これは、既に貴兄の「穂高岳」でつくされているわけ
であって、何も私のやると云うのはないと思ったのですが、当時、本職の事で
いそがしかったので、心なきずも返事をかかずにどうしたものかと思っ(述)いま
した。併し、ガイドブックとはどういうことかと、もう一度考えてみますと、
例えば穂高のどこどこの岩場のルートへ行ってみたいというこう
命望のある者に、①まずその人がその場所を登る資格があるかどうか、
即ち安全に登るだけの実力をもつかどうか、の査定をすることが大切で
次に、②毎ガイドブックさえあれば間違いなくそのルートにとりつくことが出来
て登攀中といえども目的、どのような位置において、これから、どの位の
時間がかかるのか、ということを知らせる必要があると思います。
丁度、スイスのガイドは、例えばマッターホーンについてグラードへゆきたいという
とまず手頃なゲレンデで客のテストをする。次に、つれていって間違いなく
安全にもどってくる。わけですが、ガイドブックがそれのかわりをすれば

No.

よいわけだと考えました。又、最上は寫真を（ふる）ことが多くなっているので寫真とステッキと、平面図をいつも同一ステールで並べていれば、ルートをみる目がはっきりすると考えました。併し兵は、①については書見がかっていてみえた。又ニッポンバッハの岩場等級表みたいなものをつくって、例えば中又白の上部のガラ〳〵の部分は、どの位むつかしいから、ここを登るには、少くともどこでテストしておかねばならないということが、自然にわかるようにしなければならないと思います。併しこれは、又大へんなので、もし、新為氏が本年夏に間にあわせたいと考えておられればというて、私達だけでは出来ないので、一月に北穂へいたとき、小山さんに話をして、後方、本谷、白出のコヤンを含め、調査をたのんで、私達は、屏風、西日、明神、槍岳をやると一応話したのですが、事実は小山さんの小屋稼業で不可能ではないかという事が後で分ったのですが、それで十二月に東京へいたとき、新為氏、長越氏（共に初対面で非常に嬉しかった）におあいして、この事について、よく話しあって、明年の夏にまにあえばよかろうと申しました。きめました。（私達としては昨夏、昨秋とで、屏風、西日、明神を殆んどのぼりなおし、為氏はかなりあるいていたので、そのつもりで、みていただいて、一応意見のあるところを、

No.

了解してもらえるわけです。実は長然さの発言で、主な初登攀記録を入れたらどうか、ということで、私も賛成しましたが、何しろ、そうなると、私達だけの力ではどうにもなりません。すべてのルートを登りなおして比較したり、ルートを[redacted]うしたりすることは出来ても初登攀記録になると、その記録をかつた人が、誰であろうと、どうしておかすることに耐むかという、ことがわかりませんので、これは、貴兄にお願いしなければならない。（もとより、そうでなくても、登るべきルートのすべては、貴兄の「秘高考」による以外になく、貴兄のお許しと、御力がなくては、何ひとつ出来ませんが）と考え、今日が、終り次第、全力をそちらに向けようと考えていたのです。併し、今や、意外の事件で、すべてのルートを登る、ということ、なければ、それ、どころか、このガイドブックを完成するということ自体に、否、岩稜会、そのものにも、けんとうさるべき事態となって、一切は白紙となったとも、みてよいのですが、もう一度、機会であり、なおすことになる、わけですが、わたくしとしては、私の弟も、このことには、力をそいでいたので、その、記念の意味をもかね、ここで、目標をガイドブックにおきたいと願っている次第です。

本当に勝手なことばかり申上げて、すみませんが、そうなったときには、どうか

No.

よろしく、文字通り御指導 御鞭撻 賜わりますようだしてお願い申上げます。

別紙がりバンガリにつて、私自身の根本的なあまり、専科のミス等考えていただき、又実験についての方法等 御教示いただければ幸と存じます。

誠に筆果れました

尚、末筆ながら奥様に宜しくお伝え下さいますよう。

百十九

五岡邦夫

スワヲ 堀部様